

# 「納得でききる治療受けるために」

## がんを

## 生ききる

≧7≪

### 患者遺族

「全国どこに住んでいても、世界水準の治療を受けられる体制作りを訴えていきたい」

大阪市の濱本満紀さん(49)は、がんの患者に患者遺族の立場からかかわる。知り合いのがん患者には、残された時間を患者会の活動にささげ、亡くなった人も多い。「がん医療の向上を求める声を絶やさないようにするのが、私の役目」と話す。

母の曰下篤子さんが大腸がんと診断されたのは、00年春だった。

## 母送れた日々充実し希望失わず



抗がん剤治療を始めた後の曰下さん(左)と濱本さん

翌日、母と2人で行くこと、医師は告知せず

「家で過ごして、おかし」

「家でも過ごして、おかし」

「家でも過ごして、おかし」

「家でも過ごして、おかし」

「家でも過ごして、おかし」

母はホテルにこもって泣いた。人工肛門の手術のため入院する日になって「行きたくない」と言ったが、濱本さんの説得で最後には納得してくれた。手術は無事に終わり、東京と大阪を往復する抗がん剤治療が始まった。

02年7月13日、母は亡くなった。その1カ月前まで、店に立ち続けた。治療を受け、2年間のかけがえのない時間をもらった。

濱本さんの前で、母は常に明るく笑っていた。「実は一人で悩みや孤独感に耐えていたのでは……」と悩むことがあがあるが、そのたびに思い直す。

「見放されてもおかしくない状態だったのに、最後まで希望を失わず、充実した日々を送れた。母が受けたような納得できる治療が、どこでも受けられるようになるために働きかけることが、お世話になった医師や、母への恩返しになる」

≧つづく(月曜掲載)≪

# 親友の遺志 胸に刻み

## がんと生きる

≫8≪

### 患者遺族

「がんと告知されても、希望さえあれば絶望のふちから立ち直れる」

がんと告知されても、希望さえあれば絶望のふちから立ち直れる。栗原さんは「思う存分面倒見たれ」と快く会社を抜けさせてくれた。ところが、しばらくして、日下さんのな2人がそうだった。1人は、母の日下篤子さん(当時66歳)。もう1人は、10代のころに劇団で知り合った7歳年上の栗原秀久さん。濱本さんが離婚した時、社長を務める舞台装置の製作会社に誘ってくれた一番の親友だった。



栗原秀久さん  
—濱本さん提供

## 身近で接した経験、活動の原動力

栗原さんは責任感が強く「一度決めたら俺が責任を取る」という人だった。抗がん剤治療など闘病は長期にわたり、病室に携帯電話を持ち込んで部下に指示を出した。医師の説明は、親族が遠くに住んでいるため、濱本さんが一緒に聞き、治療法を求めて病院を訪ね歩いた。

06年6月、内臓全体に炎症が広がり、危険な状態に陥った。心筋こうそくと糖尿病の持病もあり「手術は難しい」と医師は言う。濱本さんは追い詰められ、母が抗がん剤治療を受けた東京都内の医師に相談。「この人なら手術できる」と茨城県病院にいる医師の名前を告げられた。大阪の病院でも、主治医らは不眠不休で治

手術は成功した。だが、退院を3日後に控えた06年7月27日、出血が見つかり、検査しようとした矢先に心臓が止まった。

「集まれる人間は全員集まってくれ」。医師が院内放送で呼びかけた。20人以上の医師や看護師が駆けつけ、交代で心臓マッサージを続けた。一度は動き始めたものの、自力では動かなかった。

懸命に努力する医師らの姿を、濱本さんはガラス越しに見つめ続けた。「本望だったよね」。すべてが終わり、栗原さんに語りかけ



各国の患者会が集まって開かれた国際会議について発表する栗原さん。身近で見えてきた患者の姿が活動の原動力になる。

02年に亡くなった母、そして栗原さん。濱本さんは一緒に病院に通い、日本の医療の現実を目の当たりにした。「全国には、誠意があり、腕があつて、患者思いの医師がいる。でも、一人一人の医師に依存しては、そのうち疲弊してしまう」。施設の老朽化、医師不足……。医療の課題を肌で感じ「自分に何かできることはないか?」と考え始めた。

栗原さんの言葉がよみがえった。「退院したら先生にあいさつに行つて、患者会、作らなあかんのう。名前は『イチカバチカ』、それとも『来るなら来い』かな」。遺志を胸に刻み、濱本さんは患者や患者家族の声を医療現場に生かす道を探る活動を始めた。

【渋谷千春】  
つづく(月曜掲載)